

発達性ディスレクシアと診断された児童の併存症などの背景因子の検討

○平谷美智夫¹、河野俊寛²、滝口慎一郎¹、石坂郁代³、大石敬子⁴

¹平谷こども発達クリニック、²石川県立明和特別支援学校、³北里大学医療衛生学部、

⁴多摩北部医療センター

【目的】

当クリニックで発達性ディスレクシア（以下 DD）と診断される児童は、①就学後に読み書きの問題を主訴として受診するケース、②就学後に注意欠陥多動性障害（以下 ADHD）や自閉症スペクトラム障害（以下 ASD）などの行動上の問題を主訴として受診するケース、③就学前に受診し就学後に読み書き困難が顕在化するケースがある。教育現場での DD 理解が深まるにつれて①が増えているが、②が多い印象がある。そこで、2001.4 のクリニック開院以来 DD と診断された児童の背景因子について検討を加えた。

【方法】

DD の診断は、当初は典型的なケースを臨床経過より診断していたが、大石の指導により、「小学生の読み書きスクリーニング検査」（読字と書字の正確さを評価）、2）モーラ削除・逆唱などの音韻検査、PVT-R、抽象語理解力検査、Rey 複雑図形・フロスティックなど視覚認知検査などを実施し総合的に診断してきた。数年前より「特異的発達障害の診断・治療のための実践ガイドライン」も活用している。

【結果】

DD と診断された児童 80 名（（ ）内は人数）。

【性別】男子(75)、女子(5)【初診年齢(歳)】

6>(16)、7-9(45)、10-12(13)、12<(6)

【併存疾患】ADHD(54: 68%) (ADDI : 12 ADDC : 32)【中枢刺激剤】投与(38)、有効(37)

【併存疾患】ASD(36: 45%) 内訳: 自閉症(8)、アスペルガー (7)、NOS(18)、

ASD+ADHD(22)、ADHD 単独(32)、ASD 単独(14)、DD 単独(12: 15%)【IQ 分布】

70>(2)、71-85(20)、86-100(41)、101<(17)

【初診年】2001~4 年(16)、2005~4 年(31)、2009~3 年 (33)

初診時 7 歳以上の児童の受診主訴の検討：ADHD・ASD 併存群では、行動面の主訴 84% に対して学習面 60%前後と低かった。

クリニックで診断される DD では、男子が圧倒的に多く、読み書き以外の行動面の問題を主訴に受診され DD と診断される児童が少なくなかった。幼児期に読み書き以外の問題で受診され、療育経過の中で DD と診断されるケースも少なくなかった。

【結論】

クリニックで診断される DD 児には ADHD や PDD が高率で併存し、反面、DD 単独は 15%と少なかった。ADHD や ASD が併存すると、行動面の問題に焦点が当たり学業面の問題が見落とされている傾向があることが示唆された。DD 児の中には LD ト라우マを呈した児が少なくなかった。DD の療育は、読み書き指導・学業支援と特別な配慮などの特別支援教育、クリニックでの ST（読み書き指導）や認知・行動療法に加えて薬物療法が必須である。

DD では他の発達障害同様早期診断が重要であり、ADHD や ASD に必要に応じて読み書き評価を施行することが重要である。

謝辞：診断作業にあたった、川田麻悠子・高井雪帆・伊波みな美・村田里佳・吉田美穂・北本翔子（クリニック ST）、藤岡徹心理士に感謝します。

連絡先：平谷美智夫

〒918-8205 福井市北四ッ居 2-1409

平谷こども発達クリニック

E-mail: m-hiratani@hiratani-c.jp